

グローバリゼーションの中のムスリム社会

——エジプト1月25日革命とイスラームの在り方についての覚書——

大稔 哲也

はじめに

中東やイスラームを取り巻く局面は、日々目まぐるしく変転している。今日、世界中どこにあっても、否定的な含意にせよ、イスラームや中東が話題に上るようになった。「グローバル・イシュー」にイスラーム関連のテーマが加えられることもある。専門家でもなければ、いや専門家であっても、その展開を丁寧に追ってゆく余裕はない。結果として、口当たり良く極度に単純化された中東・イスラーム論が跋扈し、さらにマスコミやインターネットを通じて増幅され、固定化されつつある（その一部は意図的に作り出されたものにせよ）。そのような中にあっても、相変わらず明白なのは、ムスリム（イスラーム教徒）が現在、世界の総人口の1／5以上を占め、近未来においても増加し続けていくであろうことである。現地でその息吹に触れる限り、その減少を願望する一部の言説はあまりに現実とかけ離れており、むしろいかなるムスリムが増加するかが問われているように思われる。ここでは「アラブの春」を経た中東やムスリム（イスラーム教徒）社会の今日的（2014年6月）在り方について、本学会から与えられたグローバリズムという視座から問いを投げかけてみたい⁽¹⁾。

1. イスラームのグローバル性とグローバル化したイスラーム

ひるがえって考えると、そもそもムスリムの「ウンマ」⁽²⁾がグローバルな志向性を有するものとも言えよう。ムスリムによる理想的宗教共同体としてのウンマは、今日の国民国家の枠組みを軽々と超えてボーダーレスな存在たりうるものであり、国民国家システムとは本質的に折合わない概念である。そして、このウンマを理想的な形で再興せんとする近年の動向も、現今の世界を覆いつくしている国民国家体制と鋭く対立する。このウンマを求める者にとって、それは栄光の過去を回復する試みであるとともに、歴史を通じて（とりわけ近現代史において）

継続的に掲げられてきた見果てぬ夢の実現ということになろうか。

また、ウンマと関連しつつも視点を変えると、汎イスラーム主義もグローバルな志向性を持つ歴史的試みであった。それは、ムスリムの世界的な連帯と「イスラーム世界」の統一を指向する政治イデオロギーとして、とりわけ19世紀末から20世紀前半に影響力を保持した。ジャマル・アッディーン・アフガーニーはその代表的なイデオログである。第二次世界大戦前から大戦中にかけて、日本もアジア主義を背景として、汎イスラーム的な系譜との連帯や、その政治的利用を盛んに試みていたと言えるであろう⁽³⁾。

では、現代の、とりわけ現在進行形のイスラームの様態について考えを馳せるならば、そのグローバル化が急激に加速中であることに気づく。これは情報と人の動きの地球レベルの活性化と軌を一にしている。換言すれば、イスラームは現代におけるグローバリゼーションと非常に相性の良い側面も有していると思われる。そして、それを意図的に活用する人々もいる。

これは、前近代におけるイスラームの拡大とは位相を異にするものである。前近代の拡大は、これに比較すれば空間的にも量的にも限定的であった。その背景として、イスラームが元来、布教のための組織やそれを派遣する主体も有していないこと、ムスリム諸地域が植民地化されることはあっても、植民地を求める形態で世界規模に展開することはほぼなかったこと、強制改宗を良しとしない原則がその一応の歯止めとなりえたこと、などを指摘できるであろうか。

現代におけるグローバリゼーションの背景には、情報機器や情報ネットワークの発達が欠かせない。インターネットや携帯電話、衛星テレビはもとより、フェイスブック、ツイッターなどそれらを通じたソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）は、ムスリムにとっても連絡手段や情報拡散の要諦となっている。しかし、こうした機器と技術を通じた情報伝達とプロパガンダに長けているのは、伝統的なムスリムではなく、むしろ急進的なイスラーム主義者であろう。彼らには、もともと理系出身者や、伝統的なイスラーム教育以外の教育を受けてきた人々が多く含まれている。彼らやムスリム一般の人間関係のあり方には、個々のセルが時にクラスターを形成しつつも、ヒエラルキー型ではなく、ネットワーク状に横へ拡大してゆく傾向が認められよう。それらをつなぐ情報ネットワークのグローバル化と、そこにダイレクトな人間間のつながりを生じさせる人的移動のグローバリゼーションは、急進的なイスラームの拡大に格好の土壌を用意することとなったように思われる⁽⁴⁾。

また、中東諸国等から大量の移民・難民が、植民地時代の旧宗主国や他の先進国へと流入している人の動きも見逃せない。しかも、移住先の社会でしばしば長期にわたる疎外感を経験している。その際に、植民地期の遺制である旧宗主国の

言語教育は、皮肉にもこれらの移動を支える土台として機能している。フランス語はその最たる例であろう。さらに、以前に比べて現在、世界的に英語運用力の全般的な向上もうかがえ、そのことも状況の展開に拍車をかけている。

今日、アラブ民族主義やアラブ社会主義、あるいは各種の左翼イデオロギーなど、かつて中東を席卷した大きな物語はその大半が挫折しつつあり、剥き出しの状態に曝された人々に残された主要な凝集手段は、もはやイスラーム主義か各国のナショナリズムくらいではないかと感じられることがある⁽⁵⁾。かつてこれらの挫折を企図した外部勢力は、現在イスラーム主義と対峙する結果に陥っている。軍事独裁政府とそれによる人権抑圧と非民主化、そして欧米による経済的圧迫や資源搾取、暴力的介入や収容所における拷問、これらに対して唯一同じく力をもってプライドを保ちつつ立ち向かわんとする勢力として、イスラーム主義は台頭の余地を見出してきた。この場合、イスラームが人々を政治的に束ねて動員する手段として機能しだし、劣位に置かれた人々に残された抵抗の（最終）論理として、人々に拠り所を提供することになろう。

彼らには前述のように、過去への回帰の言説とともに、欧米系学問を修めた理系出身者などにより明白なように、「近代」の影響が色濃く刻印されていると指摘されてきた。もちろん、彼らの中にも、長年のイスラーム諸学習得を誇る者はいるのであろうし、その思想的ルーツを中世まで遡及することも可能であろう。しかし、全般的には近年特に、学問を修めた師とじっくり顔を突き合わせて真知を体得するよりも、インターネットや書籍などを通じて、短期間に宗教書の字面を追ひ、額面通りに受け取る傾向は否めないであろう。即物的な理解が拡がれば、断片的知識による全体像の構成へと流れかねない。すると、バーチャルへの依存が現実社会への洞察をしのぐことになる。イスラームの総合的な知、歴史的経験の叡知、誇るべき共存の経験、内面へ向かうスーフィズムの精神性などは、掌からこぼれがちとなる（彼らからすれば、それこそが多くは後代に捏造された宗教的逸脱物ということになろうが）。

近年のイスラーム的表象の席卷は、エジプト社会における女性のヴェール（ヒジャーブ）着用にも如実に表れている。例えば、1970年代頃まで、カイロ大学文学部においてヴェールを着用する学生はほとんどいなかったが、80年代途中からは増加の一途をたどり、現在ではムスリム女子学生のほとんどが着用し、その中でさらにファッション化が進展しつつある状況である。

また、筆者が2006-2008年にかけてフィールドワークを行ったマリ共和国の事例も、この経緯を明白に示している。マリには石油のような資源的なうまみも直接は見出されにくく、グローバリゼーションの蚊帳の外に置かれがちであった。外国の国家・組織や資本は、リビアと中国、欧米のキリスト教宣教団くらいしか

食い込んではいなかった。日本に至っては、2008年まで大使館すら設置していない有様であった。そのイスラームは極めて穏やかかつ非暴力的であり、北部のトゥアレグ人らこそ劣悪な状況に置かれて反政府闘争を続けていたが、全般に精巧な細工物のような多民族共存の叡知を見せていた。しかし、2011年のリビア・カッツァフィー（カダフィー）政権崩壊後、大量の武器とともに武装勢力がこの地域へとなだれ込んできた。調和は破壊され、マリもついに否が応にもグローバル化の渦中へ投げられていった。フランスの軍事介入はこれを押し戻しているが、今後も予断を許さない。

このように、グローバル化はイスラームにおいても、その全体や極端な一部の拡大にとどまらず、情報や宗教理解の一元化の方向へ強く作用する側面を有すると思われる。そして、横に緩やかなネットワークによってつながれた彼らの共振性はますます高まっていると思われるが、そのイスラームがいかなるイスラームであるのか、ますます問われている。

2. 「アラブの春」、エジプト 1 月 25 日革命の グローバル性とローカル性

かかる状況下、情報や人の流れのグローバル化のもとで、それらを活用しつつも、イスラーム主義とは一線を画して胎動する大きなうねりが中東を席卷した。2011年のいわゆる「アラブの春」の始まりである。チュニジアに端を発したこの怒濤の流れは、エジプトまでは非暴力運動の姿を保っていたが、リビアやシリア



タハリール広場の歌手
2011年3月11日



タハリール広場の親子
2011年3月11日

などへ飛び火するやいなや、欧米の介入を招き、苛烈な暴力の応酬と化してしまった。私は「アラブの春」としてくられる一連の出来事を、チュニジア・エジプトまでの内発的な革命の連鎖であった前半部と、その後のリビアやシリアのように外国勢力が乱入した暴力の応酬である後半部とに区別し、この両者に質的違いを認めるべきであると考えている。ここではエジプトの事例に焦点を絞って話を進めたい。

エジプトの2011年「1月25日革命」⁽⁶⁾では、世俗派リベラル勢力がその淵源となった。彼らが連帯して中枢部を形成しつつ大まかな筋書きを用意して初動し、現状に不満を持つ大衆を動員した。のちになってからムスリム同胞団や、人口の6-12%を占めるキリスト教徒も追従するようになり、広範な社会階層の人々が合流していったものである。その特徴はいくつも挙げられようが、非暴力運動であったこと、領導するリーダーを擁さなかったこと、携帯電話や衛星放送、SNS、YouTube、新聞などが有機的に連関し、不特定多数動員の極めて有効な手段となったことなどは特筆すべきであろう。非暴力については、十分な検討の上で練られた戦略でもあった⁽⁷⁾。

ただし、革命の思想と戦略について言えば、「自由」「公正」「民主主義」「人間としての尊厳」「腐敗の一掃」などのテーマは掲げられたものの、それらを統一する思想を編み出す前に、現実が先行してしまった観がある。また、実際に参加した大衆は、革命による不正の一掃で、賃金上昇や生活改善なども可能と信じていた。参加者は同床異夢の中にあっただけであり、かろうじてムバーラク大統領退陣とその息子による大統領職世襲を廃するというところで、最低限の合意がみられていたに過ぎない。それゆえ、これを「革命」とは呼びたくないとする、主として年配インテリの意見もしばしば聞いた。

この革命はイスラームのグローバル化と並行しつつも、それとは異なる軌道を描いたものであった。思想的立ち位置としては、中東における武闘組織やテロ攻撃に対する最大のアンチテーゼ足りうるものといえる⁽⁸⁾。実際に、1月25日革命直後に若者層のアイドルとなったのは、サッカー・チームの応援組織で革命時に活躍を見せたウルTRAS（アルトラス）メンバーらの若者であり、イスラーム主義者は革命直後に一斉に獄中から娑婆へ出たものの、エジプトでは時代の後塵を拝するようになった。非暴力でむき出しの暴力と対峙する若者たちが「格好良く」見えるようになったのである。ジョージ・W・ブッシュ大統領時代の米国などによるイラク攻撃に対しては、暴力に力で立ち向かおうとする姿勢が一定の支持を集めたが、オバマ大統領期であった1月25日革命直後には、そうした傾向が収束していたように思われる。

また、この革命を通じて、各種の芸術は（カイロであれば）タハリール広場を

中心に一斉開花した。芸術家は広場を目指したのだ。音楽、詩、シュプレヒコール、壁絵、インスタレーション、瞬間芸術、映画、演劇、小説、顔のペインティング、プラカードにとどまらず、冗談や笑い、風刺も重要な役割を果たした。すなわち、「面白くなければ革命ではない」というようなあり方も、市民の大動員に寄与したことであろう。実際には多数の死者を出したタハリール広場であったが、そこで革命中にそこで結婚式を挙げたカップルもいたほどである。『イザイ（どうして）』、『自由の声』、『ヤー・ビラーディー』などのヒット曲が次々と誕生し、ラーミー・イサームのように、革命を機に上京してスターとなったフォーク歌手もいたが、何よりエジプトは国歌がそもそも抵抗歌であった。

エジプト1月25日革命はナショナルな感情に強く訴え、実際に「国民」の統合的方向へと作用したと思われるが、同時に世界中の他者について顧慮する感性も併せ持っていた。エジプトの人々は革命中、チュニジアを初め各国からアドバイスを受けていたし、旧ユーゴスラビアの青年運動グループであるオトポールへは、あらかじめアドバイスを受けに行くなどしていた。また、エジプトの人々は、リビアやシリアでの革命の進行に強い関心を持って交信し、時に支援するなどしていた。東日本大震災に対しても、深い同情と哀悼の意を表していた。さらにチュニジアやエジプトの非暴力革命スタイルは、中央アフリカ、「ウォール街を占拠せよ」、日本における反（脱）原発運動、日本の「肉の日」運動、ブラジルの反ワールド・カップ運動、タイ、中国、香港などへ、直接／間接に影響を与



広場のアート（一周年）
2012年1月25日



広場のグラフィティ



革命歌手ラーミー・イサーム

えていった。筆者はこの状況をかつて「共振する世界」と表現したことがある⁽⁹⁾。

これら共振の背景には、まずエジプトと日本がともに危機的な状況に置かれ、直接・間接に幾つもの領域で共振の関係を示したことが挙げられよう。他方、この共振には、今日の世界的状況が共有されていたために、両者に類似の振動が生じている部分も見受けられる。それらすべての展開の背後には、情報機器の発展が控えていよう。

また、革命の最中・直後には、自警団の結成や地域の清掃活動など、創発性に富む現象がエジプト中に生じた。創発的な連帯をめぐる議論について



革命の記憶と記録
(タハリール広場にて。2012. 1. 28)



ムハンマド・マフムード事件
(衝突と催涙ガスの現場。2011年11月)



人民議会選挙の投票所
2011年11月28日



タンターウィー将軍の巨大張りぼてが、治安部隊に襲われた女性を描いた絵画を襲うというパフォーマンス (2012. 1. 28)



革命一周年集会
(2012年1月、ガイ・フォークスの面を被る若者)

は、様々な問題点も指摘されており、理論的練度を高めてゆく必要があろうが、依然として有効な比較検討の視座を提供してくれると思われる⁽¹⁰⁾。

しかし、革命の季節が次の局面へ移行し、瞬時の「虹」を現実の政治戦略や制度へいかにして結実させてゆくかという段階になると、当然ながら試練と困難の連続が待ち受けていた。反革命や後退も生じている。ただし、ここではっきりさせておきたいのは、革命の時期的単位をどこまで取るかという点である。本稿でいう「エジプト1月25日革命」とは、2011年の1月25日から2月11日あるいは3月中旬くらいまでを指定しており、もしくは明記する場合には同年5月頃か9月辺りまでを含むこともあるものとする。革命の時期単位をある程度明確化させなければ、革命による達成点とその後の混乱の区別も不分明となろうし、革命の評価にも次々と新たな要素が加わり、收拾がつかなくなるであろう⁽¹¹⁾。

革命時にメンバーが革命賛歌の『自由の声』をヒットさせていたエジプトのロック・バンド「カイロキー」も、2014年には『ぶっ飛ばしたいくらいだ』と、革命時の希望から外れてしまったやり場のなさを一種開き直って歌っている。しかし、イスラーム主義とは出自と立ち位置の異なる思想として始まったエジプト1月25日革命やチュニアのジャスミン革命の意義は、改めて問い直されなければならない。あらゆる階層の人々を糾合し、非暴力で大統領らを追いやり、「民主的な」手続きによる「公正な」選挙を取り敢えず成功させるなどの成果は、歴史に書き込まれることであろう。

おわりに代えて

ここで、グローバリゼーションが伴う負の側面についての指摘を改めて繰り返すまでもないであろう。「(液状)不安 (Z・バウマン)」、「リスク (U・ベック)」、「恐怖 (A・アパドゥライ)」など、冷徹なまなざしが注がれ続けてきた⁽¹²⁾。そして、貿易や資本、監視や情報、強制や武器、犯罪やテロリズムをめぐって、高度に発展したグローバリゼーションは、しばしば少数派への排斥・暴力や二元論の世界観へ流れやすいとも指摘される⁽¹³⁾。また、それまでローカルな文脈に留め置かれてきた思想や集団がグローバルな文脈へ接合され、一気に拡散することもあり得る。

すでに述べてきたように、グローバリゼーションは一面でイスラームの拡大と見事に波長を合わせており、またイスラームを標榜する急進派による過激思想は、さらにそれとの親和性が高いと思われる。中世にまで遡る思想的淵源を有しているにせよ、情報機器テクノロジーと人間の移動手段の発達を背景として、グローバリゼーションは中東やイスラームをめぐるひずみの際限ない拡大に資している。そして、拡大した先では軋轢をもたらししている。

今日、短期的に見ると、アメリカ合衆国を中心とするイラク侵攻や、それに付随したアブー・グレイブ収容所における虐待事件、これらがどれだけ中東をめぐる諸問題の底流で悪影響を与えてきたかは計り知れない。また、中東諸国の独裁政権によって、誰よりも激しい人権侵害を被ってきたムスリム過激派や、中東外の大国によって身内を虐殺された人々は、その受けた仕打ちを同じく他者へ報復しようとしている。そして、第1次世界大戦後の処理などを通じて、ヨーロッパ列強がその都合で中東において恣意的に創った諸国家とその国境線は極めてろい側面を有し、絶えず崩壊の危機をはらんでいる。その構造へ異議申し立てを続け、脆弱となった部分を食い破りつつ、今後もまだ武装勢力の運動はグローバルに続く。

しかし、このような折にこそ、イスラームの在り方についての問い直しとともに、中東における様々な思想の系譜へと考えを馳せる必要がある。また我々は、グローバリゼーションの時代にふさわしい、新たな姿の中東研究を模索してゆくとともに、決してひるむことなくことなく冷静に将来を見据えて、日本の中東イスラーム研究を深耕してゆく必要がある。そして、研究上の重要性がますます増大する中で、(怖れからか)新たな研究志願者が減少しがちな日本における中東イスラーム研究の現況を打開し、根づいてきた中東イスラーム研究を今まで以上に推進してゆくべきである。とりわけ、長大なタイムスパンによる人文学研究や、政治情勢に流されない基礎研究を疎かにすることにつながってはならない。これらは、これまで日本における中東イスラーム研究の長所として、一定の評価を得てきたはずである。

そして、本稿で述べてきた現状認識と、我々がそれとどう対峙するかは無関係ではないが、それに流される必要もない。我々が人間とその社会を扱う限り、グローバルな文脈を見極めるとともに、例えば様々な形で現地へ赴き、「身体」を介して日常的な生活から抗するすべを探ることの意義も、依然として忘れるべきではないと思う。それは、ディテールとマクロなグローバルとの間をつねに往還運動しつつ、その間の定点観測を欠かさない構えにつながるであろう。

註

- (1) 本稿は、早稲田大学多元文化学会年次大会シンポジウム「グローバリズムと世界宗教」(於早稲田大学戸山キャンパス、2014年6月7日)にて口頭発表した内容をまとめたものである。「グローバリズムとイスラーム」というテーマは筆者に課されたものゆえ、諒とされたい。
- (2) ここで、ウンマとは宗教共同体を指し、とりわけ預言者ムハンマドに従うイスラームの共同体を示す。
- (3) 小村不二男『日本イスラーム史』日本イスラーム友好同盟、1988年。
- (4) 本稿で急進的イスラームといったときは、イスラーム主義者(註5参照)の内の

思想的急進性に焦点を当てた表現であり、暴力使用など行動の過激な側面に焦点を当てた場合には、イスラーム過激派と仮称することにする。実際には、両者が重なることもある。

- (5) 大塚和夫『イスラーム主義とは何か』岩波新書、2004年によると、「イスラーム主義」とは、19世紀後半から開始された西洋主導の「近代化（多くの地域では植民地化の形を取る）」の流れを十分に意識し、影響を被りつつ、それでもなおイスラームを政治的イデオロギーとして選択し、それに基づく改革運動を行おうとする政治イデオロギーや運動を指す。
- (6) 本稿では、現地でのアラビア語の呼称の訳語として「革命」を用いる
- (7) 非暴力は明確な戦略であったが、筆者自身が「4月6日運動」（革命を仕掛けた主要グループの一つ）の創設者アフマド・マーヘル氏にインタビューしたところでは、この際のバイブルとされたとしばしば指摘されるGene Sharp著*From Dictatorship to Democracy*（ジーン・シャープ著『独裁体制から民主主義へ』（ちくま学芸文庫、2012年刊）を事前に読んでいたのは、メンバーの中でも1-2人程度ではなかったかという。なお、筆者も実見したところであるが、ガンジーは革命1周年集会においても、テーマの1つとなっていた。
- (8) これを象徴するかのように、革命直後の2011年2-3月に革命について論評を発表した研究者と、のちに自称「イスラム国」について（賛否にかかわらず）論評する研究者とは見事に二分されている。なお、後者の中には、「イスラム国」拡大の要因となった米国等のイラク侵攻によって中東に民主主義が広がるとした者も含まれており、注意を要する。
- (9) 大稔哲也・島蘭進編『死者の追悼と文明の岐路 2011年のエジプトと日本—エジプト・日本学術交流シンポジウム報告論集—』三元社、2012年。
- (10) レベッカ・ソルニット著・高月園子訳『災害ユートピア』亜紀書房、2010年、松田素二『抵抗する都市』岩波書店、1999年、『日常人類学宣言』世界思想社、2009年、ジョン・ホロウエイ著・大窪一志他訳『権力を取らずに世界を変える』同時代社、2009年など。
- (11) 革命後に起きた混乱や反革命的事象をもって、フランス革命の歴史的意義が評価されることが少ないのと同様である。この関連で注意しておかねばならない一例を示すと、「アラブの春」はその理念や運動の性質から自称「イスラム国」を生んだのではない。この両者は、その性質を全く異にするものである。ただ、シリアやイラクにおける混乱によって、結果として「イスラム国」らが勢力を拡大する余地が生まれたことは間違いない。その場合も、「アラブの春」の理念と「イスラム国」のそれは、根本から相反することを肝に銘じておく必要がある。
- (12) 例えば、アルジュン・アパドウライ著・藤倉達郎訳『グローバリゼーションと暴力』世界思想社、2010年、ジグムント・バウマン著・澤井敦訳『液状不安』青弓社、2012年、ウルリッヒ・ベック著・島村賢一訳『世界リスク社会論』ちくま学芸文庫、2010年など。
- (13) A・アパドウライ、前掲書。

※なお、本稿で使用した写真は全て筆者の撮影による。